

ロンドン，タワーハムレッツにおけるブリックレーン商業集積地と タウンセンター政策

根田克彦

奈良教育大学教育学部

本研究は、タワーハムレッツ議会によるタウンセンター政策と、ブリックレーン商業集積地の土地利用を検討して、政策と実態との間の整合性を考察する。1990年代後半以降、タワーハムレッツ議会はブリックレーンをバングラタウンとしてブランド化し、バングラデシュ系住民の起業機会を確保し、観光地として発展させた。ブリックレーンの北部では文化・クリエイティブ産業が集積し、夜間経済が発展した。さらに、ストリートアートが観光客を全国から吸引した。しかし、2013年以降、南部ではバングラデシュ系の事業所が減少し、多様なエスニック料理と高級専門店が増加し、商業ジェントリフィケーションが進展している可能性がある。このように、ブリックレーンは、広域商圈を持つ専門的な商業集積地になりつつあるが、タワーハムレッツのタウンセンター政策では、ローカルな需要を満たすディストリクトレベルの階層に位置づけており、ギャップがあるといえる。

キーワード:タウンセンター政策、エスニック資源、商業ジェントリフィケーション、ブリックレーン、ロンドン

I はじめに

イギリスは、商業、オフィス、公共施設などが集積する範囲をタウンセンターと位置づけ、タウンセンター外における商業・オフィス開発を規制する、タウンセンターファースト政策を採用している(根田 2016:24-29)。タウンセンターには、日本の中心市街地に相当するシティセンターだけでなく、市域に散在する小規模なディストリクト・ローカルセンターが含まれる。シティセンターは中心商業地を含み、都市全域もしくはそれを超える範囲を商圈とする。一方、ディストリクトセンターは、ある程度の範囲の人々の日常生活を支える機能を有し、ローカルセンターは、より狭い商圈を有する。このように、イギリスのタウンセンターの類型は、クリスタラー的な階層構造を想定しており、その階層構造を維持・強化することは、すべての住民に対して、就業と日常サービスに関する空間の公平性を保証することになる(根田, 2019)。

しかし、そのイギリスでも、下位階層のタウンセンターの衰退が指摘されており、それにより身近な買い物機会が失われることが問題とされた(Guy, 2007:134, 185-201)。特に、食料品と女性用衣料品の供給は、宗教的・文化的に行動が制約されるエスニック集団にとって課題となる。また、一般に、就業機会が制限されるエスニック集団にとって、タウンセンターの小規模事業所は重要な起業・就業機会である(All-Party Parliamentary Small Shops Group, 2006: 12)。インナーシティにおけるタウンセンターの活性化は、その近隣エスニック集団の日常生活を支え、就業と起業の機会を与えるために重要である。本研究は、イギリスのインナーシティでエスニック集団を近隣にもつ、下位階層のタウンセンターに着目する。

そのような事例として、イギリスの地方都市、ノッティンガム市のインナーシティでバングラデシュ系住民のコミュニティを近隣にもつハイソンググリーン・ディストリクトセンターがある。ノッ

ティンガム市は当初、ハイソングリーンに大型店を誘致して、一般的なディストリクトセンターとして整備したが、バングラデシュ系住民の需要を満たす事業所の増加に応じて、政策を変更した(根田, 2018)。

ロンドンのタワーハムレッツ・ロンドン特別区のブリックレーン・ディストリクトセンターは、ハイソングリーンと同様に、バングラデシュ系住民のエスニック資源を用いて活性化された例である。ブリックレーンは、1990年代後半以降バングラタウン (Banglatown) と位置づけられ、ディストリクトセンターであるが、ロンドンだけではなく、全国から観光客を集める観光地となった。

前述のように、イギリスのタウンセンター政策は、日常生活の維持に必要な商品・サービスの空間的公平性を担保するためにタウンセンターの階層構造を維持するものであり、各センターでは、それが属する階層に妥当な規模・内容の活性化が行われる。ブリックレーンのような下位階層のディストリクトセンターの商圏が、近隣コミュニティのエスニック集団レベルから、都市全域、もしくはそれを超える範囲から顧客を吸引する規模に拡大する場合、地方自治体はそのタウンセンターの政策をいかに変更するのであろうか。これが、本研究の課題である。

なお、自然発生的に形成されたノッティンガム市のハイソングリーン・ディストリクトセンターとは異なり、ブリックレーンは、タワーハムレッツ議会が投資して、積極的にバングラタウンと命名してブランド化した事例である。本研究は、タワーハムレッツ議会のタウンセンター政策の変化とブランド化戦略、およびブリックレーンの実態を検討し、政策と実態との整合性を解明する。

商業集積地としてのブリックレーンに関する研究は多い。たとえば、1990年代以降におけるバングラタウン形成における地方自治体とエスニック

ク集団の動向に関する研究 (Buettner, 2008) と観光地化に対する批判的研究がある (Alexander, 2019)。2000年代以降になるとブリックレーンにおける文化・クリエイティブ産業の集積に着目した研究や (Mavrommatis, 2006)、商業ジェントリフィケーション (retail gentrification) が生じていると指摘する研究がある (Hubbard, 2016)¹⁾。本研究は、上記の研究で重視されなかったタワーハムレッツのタウンセンター政策に着目する。

II ブリックレーンにおける移民の動向

16世紀末に、ロンドンのシティ東側の城壁の外にあるスピタルフィールズ (Spitalfields) とホワイトチャペル (Whitechapel) では、撚糸、織物、衣服、染色に携わる移民が居住した (小森, 1985: 38-39)。一方、シティを挟んで西側には国王と貴族、官庁が立地し、シティを中心として、西側に富裕層が居住するウェストエンド、東側に労働者と工場があるイーストエンドの対照的な都市構造が形成された。

ブリックレーンはスピタルフィールズの一画を占め、17世紀後半から、フランスのユグノー難民が流入し、移住先で絹織物工業を興した (小森, 1985:47)。さらに、19世紀以降、ユダヤ人難民など多くの移民が流入した (Frost, 2011)。第二次世界大戦後には、イギリス連邦に加盟した旧植民地から、イギリスへの入国と定住の権利を保持していた多くの非白人が入流入した (原田, 2015)。スピタルフィールズ一帯には、1950年代後半以降、東西パキスタン (東パキスタンは現バングラデシュ) から移民が入流入し (Mavrommatis, 2010)、ユダヤ人は郊外に分散した (London Borough of Tower Hamlets, 2009:6)。

バングラデシュ移民の主体は、政治的に不安定であったシレット地方出身の男性であり、彼らは安価な労働力として、衣料品産業や²⁾、レストラン

ンなどに雇用された (Mavrommatis, 2015)。彼らはイギリスに定住し、彼らの家族を本国から呼び寄せた (Gard'ne, 2004)。バングラデシュがパキスタンから独立し、イギリスで非白人移民を制限する移民法が成立した1971年には、既に、ブリックレーン近隣においてバングラデシュ系移民のコミュニティが形成されていた (Glynn, 2010)。

2011年センサスによると、大ロンドン庁全体で222,127人のバングラデシュ系住民が居住する。大ロンドン庁におけるバングラディッシュ系住民のうち、ムスリムは89%を占め、職業別にみると、卸売業・小売業・自動車とバイク修理、宿泊・フードサービスが41%を占める (GLA Intelligence Unit, 2014)。また、バングラデシュ系住民の49%が、公営賃貸住宅に居住する。

2011年における大ロンドン庁の特別区別バングラデシュ系住民の分布を示したのが、図1である。バングラデシュ系住民がもっとも集中する特別区はシティ東側にあり、ブリックレーンが立地するタワー・ハムレッツ (81,377人)、次いでその東のニューアムである (37,262人)。これらの特別区が、大ロンドン庁に占めるバングラデシュ系住民の割合は53.4%に達する。

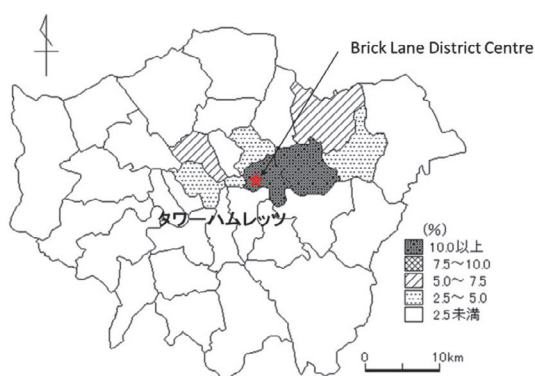


図1 大ロンドン庁における特別区別バングラデシュ系人口割合 (2011年)

(2011年センサスにより作成)

このように、タワー・ハムレッツにはバングラデシュ系住民が集中しており、2011年のタワー・ハムレッツにおける最大のエスニック集団であり (32.0%), ブリティッシュ白人 (31.2%) より多く、2001~2011年の増加率は24.1%である。一方、インド系住民は2.7%、パキスタン系住民の割合は1.0%である。なお、タワー・ハムレッツにおけるバングラデシュ人口のうち、母国であるバングラデシュ生まれは48%であり、第2・3世代が半数を占める (London Borough of Tower Hamlets, 2013a)。

次に、図2は、タワー・ハムレッツにおけるバングラデシュ系住民の分布を示したものである。その割合が50%以上のワードは³⁾、スピタルフィールズ・アンド・バングラタウン地区から東方に分布し、一方、ロンドンドックランズ再開発エリアで低い。

図3は、ブリックレーンの全体像を示した。バングラデシュ系住民の主たる宗教であるムスリム

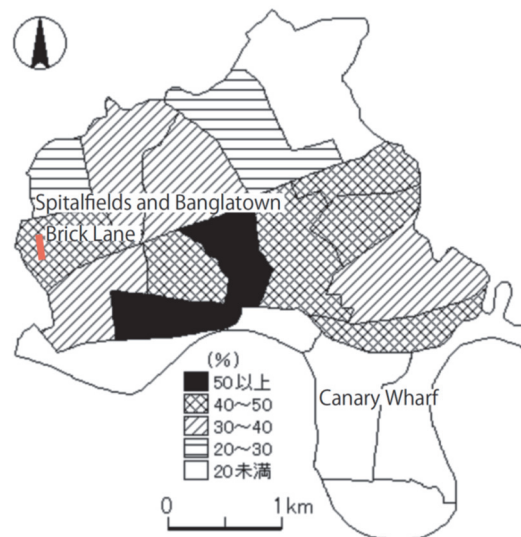


図2 タワー・ハムレッツ・ロンドン特別区におけるワード別バングラデシュ系人口割合 (2011年)

(2011年センサスにより作成)

のためのモスク (Jamme Masjid) が、1976年にブリックレーン沿いに設立された (図4)⁴⁾。

なお、バングラデシュ移民の増加は、ホスト

社会との軋轢を起こした。1970年代に、ブリックレーンとその周辺では、国民戦線 (National Front) から分派したイギリス国民党 (British

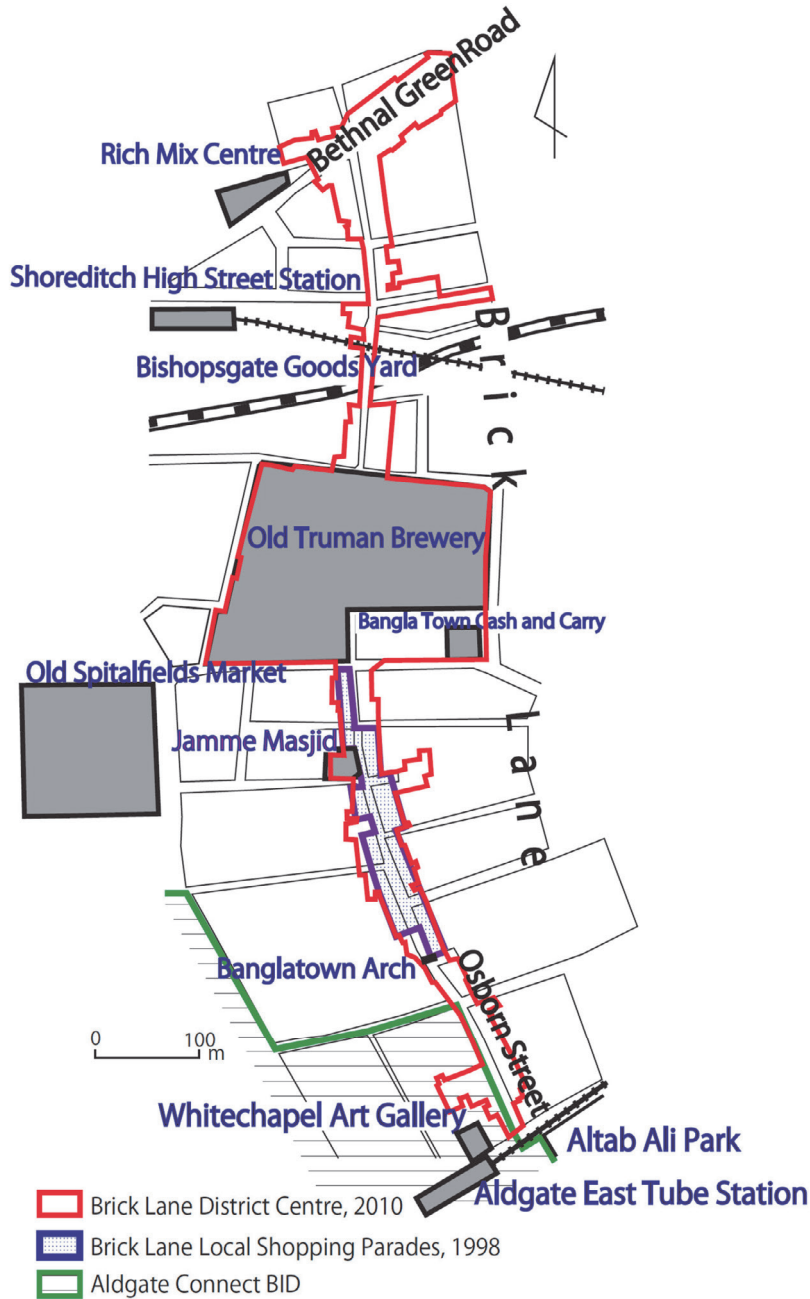


図3 ブリックレーン・ディストリクトセンター



図4 ブリックレーンのモスク (Jamme Masjid)
(2019年9月撮影)

National Party) による⁵⁾、レイシストの暴力が頻発した (Jacobs, 1996: 91)。

1978年に、オズボーンストリート南端のホワイトチャペルロードの南側に位置する St Mary's Churchyard で、織物工場に勤めるバングラデシュ人の若者 Altab Ali が、白人の若者に殺された (Fioretti and Briata, 2018)。それは、タワーハムレッツ議会選挙で、国民戦線が50議席中43議席に立候補した夜のことであった (Gardner, 2004)。それに対し、バングラデシュ系移民を主体とする7,000人がブリックレーンで抗議デモを行い、さらに白人の若者がブリックレーンで暴れた (Frost, 2011)⁶⁾。

Ⅲ タワーハムレッツ・ロンドン特別区における バングラタウンの建設計画

ブリックレーンで人種的混乱が続く1980年代に、ブリックレーンとその西方のシティの間にあるスピタルフィールズ青果卸売市場の移転と再開発の計画に対し⁷⁾、スピタルフィールズ付近に居住する、主として白人たちが、反対運動を展開した (Woodward, 1993)。さらに、スピタルフィールズに残るジョージアン様式の建物を、

アーティストが購入して住宅やスタジオとして利用し (Pappalepore, 2014)、続いて、クリエイティブ産業 (デザイナー、広告エージェンシー、ファッション産業、ウェブ基盤の企業) が流入した (Mirza, 2009)。その当時、ブリックレーンでは、トルーマン醸造所 (Truman Brewery)⁸⁾と、廃止され放置されていたビショップゲート貨物操車場 (the Bishopsgate goods yard)⁹⁾の再開発計画があった。

それらの計画は、1990年代初頭の不動産崩壊のために行き詰まったが、タワーハムレッツ議会は、スピタルフィールズ青果卸売市場、トルーマン醸造所、ビショップゲート貨物操車場の再開発をコミュニティの利益とすることを考え、それらを含めたエリア (13.7ha) の再生のために (Mavrommatis, 2010)、競争的資金である政府のシティチャレンジ (1992～1997年) に申請して1991年に採用された (Shaw et al., 2004)¹⁰⁾。この事業では、720万ポンドの補助を得て、事業所の支援やバングラデシュ系住民の英語学習プロジェクトなどがなされた (Warren, 1993: 86-87)。

シティチャレンジの再生事業において、タワーハムレッツ議会は、バングラデシュ企業家が設立した団体からの圧力を背景として、それまでマイナスのイメージがあった移民、特に、バングラデシュ系住民の文化を資本化し (Mavrommatis, 2010)、エスニック資源として開発することに取り組んだ。この再生事業には、バングラデシュ系住民のアイデンティティと誇りを高める意図もあった (Mavrommatis, 2010)。

さらに、タワーハムレッツ議会は、シティチャレンジに次いで政府が設立した単一再生予算 (Single Regeneration Budget funding, SRB) に申請した¹¹⁾。それを運営するタウンマネジメント組織が、1996年に設立されたシティサイド・リジェネレーション会社であった (Deckha, 2000:

151)。シティサイド・リジェネレーションは、タワーハムレッツ議会が主導し、シティ議会とローカル組織・企業のパートナーシップで設立された非利益コミュニティビジネスである (Deckha, 2000)。このイニシアティブの事業期間は1997～2002年、予算は1140万ポンドであり、タワーハムレッツ議会は、バングラデシュ系住民のための起業支援を行い、エスニック資源を活用した、バングラタウンのコンセプトを採用した (Cityside Regeneration Ltd., 2002)。

1997年には、バングラタウンの象徴として、ブリックレーンの南端にあるオズボーンストリートとの境界に、バングラタウン・アーチが建設された (Gard'ner, 2004) (図5)。伝統的なバングラデシュのモチーフと色彩 (赤と緑) を用いたアーチは、チャイナタウンを模したもので、イギリスで最初のバングラタウンの建設を表明する (Gard'ner, 2004)。ほかにも、歩道、街灯、案内標識の改良 (図6)、ショップフロントの改良がなされた (Cityside Regeneration Ltd, 2002:12)。

また、起業機会として奨励されたのがカレーハウスであり、1996年にブリックレーンフェスティバルが、シティサイド・リジェネレーションの補助で9月に開催された (Frost, 2011)。



図5 バングラタウン・アーチ
(2019年9月撮影)



図6 ベンガル語の標識と店舗名
(2019年9月撮影)

さらに、1998年に、バングラデシュの正月の祝祭であるバングラデシュ正月祭 (Boishakhi Mela) が、シティサイド・リジェネレーションの支援でブリックレーンにおいて開催された (Alexander, 2019)¹²⁾。バングラデシュ正月祭の際に、ブリックレーンは歩行者専用道路となり、パレードが行われる。1999年から、ブリックレーンの北方にあるベスナルグリーンロードの西方にあるウェイバーズフィールズ (Weavers' Fields) で屋外ステージが設置され、伝統的なバングラデシュの宗教歌 (*Baul music*)、ポップミュージック、伝統的なダンスなどが披露された。タワーハムレッツ議会はバングラデシュ正月祭のための委員会を組織して支援し、正月祭の集客人数は、1998年の25,000人から2001年に6万人、2006年には8万人に増加した。

なお、ブリックレーンが属するワードの名称は、1998年にスピタルフィールズからスピタルフィールズ・アンド・バングラタウンに改名され (Spitalfields Neighbourhood Planning Forum, 2020: 6)、2001年にタワーハムレッツ議会に承認された。その背景には、バングラデシュ系住民が議会の定員51人のうち30人を占め、彼らの政治力が増したことがある (Briata, 2007: 5)。2010年

には、イギリスで初のバングラデシュ系住民の市長が誕生した¹³⁾。

IV タワーハムレッツ議会のタウンセンター政策とブリックレーンの開発動向

1. ブリックレーンのタウンセンター政策とバングラタウン

前章で示したように、1990年代後半以降、バングラデシュ系住民が勢力を得たタワーハムレッツ議会は、ブリックレーンをバングラタウンとして観光地化することに力を注いだ。レイシストによる攻撃は周期的にあったが、2000年代以降沈静化した (Shaw, et al., 2004)¹⁴⁾。カレーハウスの人気は高まり、2005年にバングラデシュ料理を提供するレストランが50店になった¹⁵⁾ (Carey, 2014) (図7)。一方で、従来多くのバングラデシュ住民が従事した、伝統的な織物産業は衰退した (Carey, 2014)。

タワーハムレッツ・ロンドン特別区は、1998年のタウンセンター政策で、ブリックレーンを、最下層のタウンセンターである、ローカルショッピングパレードと位置づけた (London Borough of Tower Hamlets, 1998)。範囲は、バングラタウン・アーチが立地するオズボーンストリートとブ



図7 ブリックレーンにおけるカレーハウス
(2019年9月撮影)

リックレーンの交差点から、北の旧トルーマン醸造所までのブリックレーンの両側である (図3参照)。そのタウンセンター政策で、ブリックレーンは近隣住民の日常生活を支えると同時に、エスニック集団にとって重要な起業と就業核であるが、ほかのタウンセンターと差別化した特殊な存在とは位置づけられなかった。

さらに、1999年に、タワーハムレッツ議会は、ローカルショッピングパレードの範囲を、レストランゾーンに指定した (Carey, 2004)。レストランゾーンでは、小売店から飲食店への利用の転換が積極的に支持され、深夜営業ライセンスの付与も検討された。2002年に、レストランゾーンは、現在のディストリクトセンターの範囲まで拡大された (London Borough of Tower Hamlets, 2002)。

開発計画は2010年に改定されたが、新たな開発計画は、ブリックレーンを、最低次の階層であるローカルショッピングパレードから、カナリーワーフに次ぐ第2位階層であるディストリクトセンターに位置づけた (London Borough of Tower Hamlets, 2010)。さらに、最新の開発計画 (2020年) でも、ブリックレーンはディストリクトセンターとしての地位を与えられた (London Borough of Tower Hamlets, 2020)。なお、ブリックレーンのストリートマーケットの充実が、優先事項の一つとして強調されている (London Borough of Tower Hamlets, 2018: 17-19)。

しかし、2010年以降、ブリックレーンにおける飲食店の過剰集中を避けるために、タワーハムレッツ議会は、ブリックレーンの飲食店舗数割合が25%を超えないように規制した (London Borough of Tower Hamlets, 2013b: 21)。また、深夜営業による周辺住環境への悪影響を懸念して、2018年にタワーハムレッツ全体で、0:00～6:00までアルコールを提供する免許を持つ事業所に、深夜営業課税 (Late Night Levy) が導入された¹⁶⁾。

その背景には、カレーを提供するレストランの増加による過当競争と、バンガラタウンの観光地化に関する問題があった。カレーハウスの人気にともなう反社会的行動と廃棄物の増加、過当競争を背景にした路上における強引な客引きが周辺住民により問題とされ、さらに、賃貸料が高騰することにより、近隣住民に日常的商品とサービスを提供するローカルショップが消失していることが指摘された (Shaw, et al., 2004: 41)。また、タワーハムレッツ議会の支援で開催されたバンガラデシュ正月祭の開催は、バンガラデシュの元旦ではなく、騒々しい音楽とダンスに、厳格なムスリムは不満を持ち (Shaw and Bagwell, 2012)、バンガラデシュ系住民の有志が、本来の元旦に、より小規模なバンガラデシュ正月祭を開催した (Alexander, 2019)。

2006年には、モニカ・アリ (Monica Ali) の小説「ブリックレーン」(2003)の映画撮影に反対するデモが、ブリックレーンで行われた (Alexander, 2011)。デモは、バンガラデシュ系住民に対する偏見を増長することを懸念して行われたが、映画は2007年に上映され、高い評価を得た。

2. 文化・クリエイティブ産業の集積

タウンセンター政策とは別に、2007年に、タワーハムレッツ議会は、ブリックレーンを含む一帯を対象として、暫定シティフリンジエリア・アクションプランを作成した (London Borough of Tower Hamlets, 2007)。それは、旧スピタルフィールズ卸売市場、旧トルーマン醸造所、ホワイトチャペル・アート・ギャラリー、ブリックレーンの北方にあるベスナムグリーンロードのリッチミックスセンター (Rich Mix Centre) を中心として、クリエイティブ・文化産業の核を形成することを意図したものであった。この政策

は、ブリックレーンをシティと連動する広大な文化・クリエイティブ産業のクラスターの一部として発展させる意図を持った。

ビショップゲート貨物操車場の再開発は2020年現在計画中であるが、旧トルーマン醸造所には、マーケット、ギャラリーと展示スペース、レコーディング・デザインスタジオと、賃貸用のオフィスには多くの情報関連の企業などクリエイティブ産業が1995年に入居し、ナイトクラブ「*Vibe Bar nightclub*」は、中流階級の白人を魅了して、ブリックレーンを夜間経済の場所として、再ブランド化した¹⁷⁾。一方、ブリックレーン・ディストリクトセンターの範囲からわずかに外れるが、リッチミックスセンターは、ブリックレーンの北に接する衣料品工場跡地に、タワーハムレッツ議会などの補助で建設された¹⁸⁾。

このように、ブリックレーン一帯にはアーティストとクリエイティブ産業が集積し、さらに、大学寮もあることから、アーティストが生活と仕事する空間として発展する条件が整っていた (Pappalepore et al., 2010)。

また、ブリックレーン一帯では、非体制的なアーティストが実験的な壁画を建物の壁や事業所のシャッターに描いて注目された (Smyth, 2018) (図8)。これらの壁画は違法であったが、壁画を描く運動はロンドン全域で広まり、ブリックレーンはストリートアート発祥の地とみなされるようになった。

壁画の違法行為に対する対応として、ロンドンに基盤を置き世界中でストリートアートを展開する、グローバルストリートアート (Global Street Art) は、2012年以降、ロンドンでアーティストが合法的な壁画を作成することに協力した¹⁹⁾。ブリックレーンでは、ストリートアートを見学するツアーが開催されている。ストリートアートは芸術として認められるようになり、地方自治体と不



図8 ブリックレーンにおけるストリートアート

(2019年9月撮影)

動産所有者もストリートアートを保全し、合法化し始めた (Bonadio, 2017)。

これらのことにより、ブリックレーン北部は、バングラタウンとしてブランド化された南部とは異なり、文化・クリエイティブ産業の集積地、ナイトクラブなどの夜間経済活動とストリートアートの集積地としての地位を高めた。さらに、2010年に、ビショップゲート貨物操車場の北西部に、ショアディッチハイストリート鉄道駅が開業した。それにより、リッチミックスセンターが立地するバスナルグリーンロード方面がブリックレーンに至る新たな玄関口となった (Alexander et al., 2020: 21)。

タワーハムレッツ議会は、現在でも観光化とローカル企業支援のためのブリックレーンの再生プログラムを続けており、現状を次のようにまとめている (London Borough of Tower Hamlets, 2018: 13, 24-25, 37-39)。すなわち、ブリックレーンは、タワーハムレッツにおいて最高階層にあるカナリーワフに次いで事業所数が多く、大型店と全国的に展開するチェーンはほとんど立地しないが、多種類の中小事業所が立地する。タウンセンターの活性化に、協力的なコミュニティ組織も

多い。しかし、夜間経済の発展にともなう弊害もあり、壁画のなかには、非合法的な単なる落書きもある。また、北部ではショップフロントに投資がなされており、空き店舗は短期間で解消する傾向にあるが、南部には空き店舗が長期間残ったままである。

以上のことから、タワーハムレッツ議会はブリックレーンが夜間経済と文化・エスニック資源を活用する専門的な商業集積地として発展して広域的な範囲から観光客を吸引することを認識しているが、タウンセンター政策としては、中心地階層に基づくディストリクトセンターとしての役割を求めており、両者の整合性が欠けるきらいがある。

なお、2020年2月に、シティとタワーハムレッツの両自治体にまたがるビジネス改良地区 (Business Improvement District, BID) の設立のための投票が行われ、Aldgate Connect BIDが設立することが決まったが、それにブリックレーン・ディストリクトセンターの南端を構成するオズボーンストリーの西側の南半分が含まれた (図3参照)²⁰⁾。

V ブリックレーン・ディストリクトセンターにおける土地利用

ブリックレーン・ディストリクトセンターの形態は南北にのびる線状で、ほかの多くのディストリクトセンターと同様に、2～4階建てのレンガ造りの建物が主体で、1階が事業所、2階以上は一般に住居と倉庫などに利用されている。また、店舗の91%がチェーンではない単独店舗であり、賃貸が86%である (Alexander et al., 2020: 12)。

2010年の開発計画に示されたブリックレーン・ディストリクトセンターの範囲における1階の土地利用を示したのが、図9と表1である²¹⁾。この図によると、旧トルーマン醸造所の北端を境として、南北で土地利用の傾向は異なる。

南部は、1998年に設定されたローカルショッピングセンターの範囲を主体とする、バングラタウンであり、飲食店は南部に集中し、カレーハウスは南部にしかない。一方、衣料品店は北部に多く、そのなかにはヴィンテージファッションを販売する衣料品や国際的ブランドのファッション店、ギャラリーもある。北部の飲食店のなかには、バー、ナイトクラブなど夜間経済活動が含まれる。

次に、小売店・飲食店のエスニック事業所率とムスリム・インド系事業所率は、北部でそれぞれ9.4%と4.7%、南部のそれらは、56.8%と46.0%である。北部にはエスニック関係事業所が少なく、南部にムスリム・インド系事業所を主体とする、エスニック系事業所が集積する。なお、ハラール食品を販売するスーパーマーケットは3店あるが、それらはすべて南部に立地する (図10)。一方、単独事業所率は²²⁾、北部でも南部でも70%近い。

すなわち、ブリックレーンの北部では、ヴィンテージファッション、国際的ブランド、アート

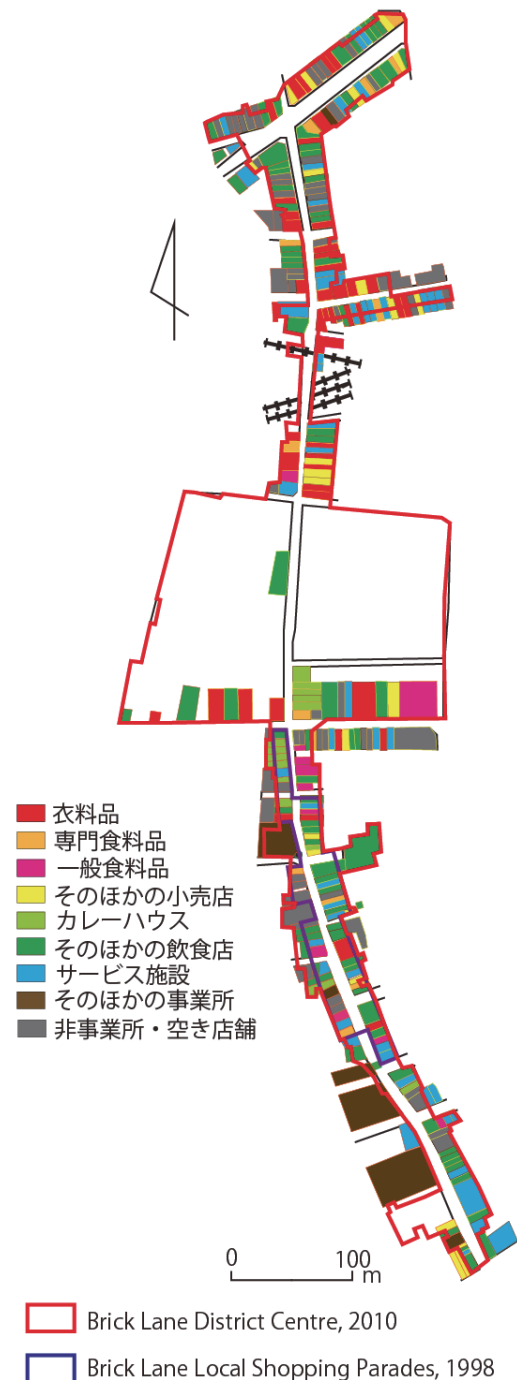


図9 ブリックレーンにおける地上階の土地利用 (2019年)

(2019年9月現地調査により作成)

表1 ブリックレーン・ディストリクトセンターにおける地上階の事業所
(2019年)

業種	事業所数	エスニック系 (%)	ムスリム・インド系 (%)	単 独 事 業 所 (%)
衣料品	45	2.22	2.22	77.78
専門食料品	12	33.33	33.33	100.00
一般食料品	11	27.27	27.27	72.73
そのほかの小売店	22	4.55	4.55	86.36
カレーハウス	18	100.00	100.00	100.00
そのほかの飲食店	88	28.41	7.95	67.05
サービス施設	37	—	—	—
そのほかの事業所	8	—	—	—
住宅・空き地	40	—	—	—
合計	281	—	—	—

(2019年9月現地調査により作成)

ギャラリー、流行のバーとレストラン、ナイトクラブが立地し、エスニック景観とは無縁のしゃれたショップフロントを有する、中流階級向けのトレンド的な事業所と夜間経済を支える事業所が主体である。

一方、南部は、エスニック系、特にバン格拉タウンを支えるムスリム・インド系の事業所が主体で、飲食店に特化しているが、それらのショップ

フロントは大衆的で、価格も比較的安価であり、ランチタイムにおけるシティの就業者と観光客を主たる顧客としている (Alexander, et al. 2020: 12)。ただし、南部でも、北部でみられるような、ヴィンテージファッションを販売する衣料品店、アートギャラリー、バー、高級食料品専門店などがある。

なお、空き店舗と住宅の割合は、北部で18.6%、南部で10.5%であり、北部の方が空き店舗率が高いが、北部では空き店舗が比較的早く解消するといわれる。

次に、ブリックレーン南部のバン格拉タウンで、2013～2019年の地上階の土地利用の変化を示したのが、図11と表2である。何らかの事業所から空き店舗になった地点は12件、逆に2013年の空き店舗に事業所が開業した地点が7件あり、結果として空き店舗が増加した。この期間にもっとも増加した業種はサービス施設であり、これはイギリスの全国的傾向と一致する。また、ハラール食品を販売するスーパーマーケット3店はすべて2013年から存続していた。

最後に、2013～2019年までの業種変化を示し



図10 ブリックレーンのバン格拉デシュ系スーパーマーケット「Bangla Town Cash and Carry」

(2019年9月撮影)

たのが表2である。表2において、高級化したと思われる地点を、網掛けした。高級化した件数は、30件中19件であり、半数を超える。また、図11によると、高級化した地点は、互いに隣接立地する傾向にある。

全体的に、バングラデシュ・インド料理から、ほかのエスニック料理に変化した事例が多く、エスニックレストランの多様化が進展している。また、紅茶専門店やチョコレート専門店、ヴィーガン食品を提供する店舗など、専門的な商品を販売

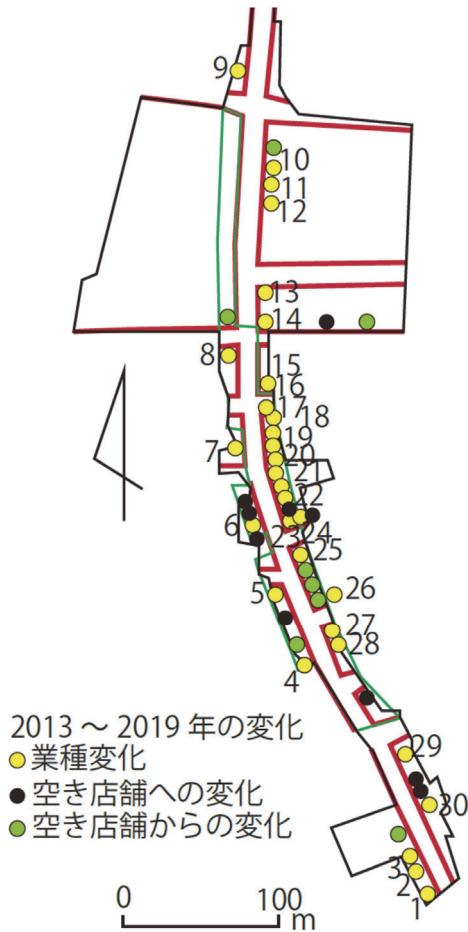


図11 ブリックレーン南部における地上階の事業所の変化（2013～2019年）
（2013年3月・2019年9月現地調査により作成）

する事業所に変更した例もある。チョコレート専門店「*Dark Sugars*」は、同じブリックレーンに立地するチョコレート専門店の支店であり、手づくりのチョコレートを販売する。経営者はアフリカ系黒人の女性で、スピタルフィールズ卸売市場で屋台を経営していたが、ブリックレーンで2013年に本店、2015年に支店を開業した²³⁾。また、紅茶専門店「*London Tea Exchange*」は、300種類以上のプレミアムティーを販売する単独店である²⁴⁾。

本論では、ブリックレーンの店舗の交代パターンで、高級化と飲食店の多様化が進展していることから、商業ジェントリフィケーションの可能性を指摘した。ただし、ハラル食品を販売するスーパーマーケットは存続しており、消失したカレーハウスはバングラデシュ系住民が経営するが、彼らの日常生活を支えるものとは一概にいけない。すなわち、ブリックレーンの南部では事業所の交代にともないバングラデシュ系事業所は減少してエスニックレストランが多様化し、高級専門店が進出するが、新規事業所の進出により、近隣エスニック集団の日常生活を支える事業所が減少しているとは一概にいけないだろう。この点で、商業ジェントリフィケーションと位置づけるには、さらなる研究が必要である。

VI まとめ

イギリスでは、中心地階層に基づくタウンセンター政策を採用しており、下位階層のタウンセンターは、コミュニティの生活を支える機能を充実することが求められる。しかし、インナーシティにおいてエスニック集団を主たる顧客とする下位階層タウンセンターのなかには、そのエスニック資源を活用して、観光地として上位階層のタウンセンターを超える商圈を有するものもある。本研究で対象とした、大ロンドン庁、タワーハムレッ

表2 ブリックレーン南部における地上階土地利用の業種変化
(2013～2019年)

地図番号	2013年	2019年
1	アジア料理	フィッシュ&チップス
2	旅行会社	携帯電話
3	録音スタジオ	スポーツクラブ
4	ケーキ屋	旅行会社
5	旅行会社	美容院
6	ギフトショップ	バー
7	ギフトショップ	衣料品
8	カレーハウス	バー
9	女性服	紅茶専門
10	紳士服	ヴィンテージファッション
11	宝石店	アクセサリ
12	カフェバー	ヴィーガン食品
13	レストラン	カレーハウス
14	グローサリー	チョコレート専門
15	酒屋	最寄品店
16	金融業	不動産
17	インド料理	イタリア料理
18	カレーハウス	タイ料理
19	カレーハウス	メキシコ料理
20	ベンガルスーパーマーケット	質屋
21	カフェ	ハラルレストラン
22	不動産	美容院
23	インド料理	インド食品
24	インド食品	美容院
25	金融業	ヴィーガン料理
26	食料品	ステーキレストラン
27	ベンガル衣料品	カフェ
28	グローサリー	ルーマニア料理
29	携帯電話	ネイルサロン
30	ベンガル音楽店	美容院

注1) 地図番号は、図11の番号。

注2) 網掛けは、高級化を指す。

(2013年3月・2019年9月現地調査により作成)

ツ・ロンドン特別区にあるブリックレーン・ディストリクトセンターは、バングラデシュ系住民のまち、バングラタウンとしてロンドンでは有名な観光地であるが、低位階層に位置づけられている。本研究は、タワーハムレッツのタウンセンター政策とブリックレーンの実態との整合性を考察した。

ブリックレーンは、数世紀にわたり移民のまちであった。第二次世界大戦後に、バングラデシュ系移民のコミュニティが形成された。1970～1980年代に、レイシストからの攻撃があり、ブリックレーンは荒廃した雰囲気になった。しか

し、タワーハムレッツ議会で政治力をつけたバングラデシュ系住民は、1990年代後半から、中央政府の競争的資金を得て、ブリックレーンをバングラタウンとしてブランド化した。バングラタウン構想ではカレーハウスが重視され、タワーハムレッツ議会は、ブリックレーンにおける小売店を積極的にカレーハウスに転換するためにレストランゾーンを設定し、深夜営業の許可も与えた。さらに、ブリックレーンを最下層のローカルショッピングパレードから、1ランク上の階層のディストリクトセンターに高めた。

これらの政策は、バングラデシュ系住民が少額の資本で開業できるレストラン産業を育成し、彼らの就業機会を拡大することと、エスニック資源を活用して、ブリックレーンを観光地として発展させることを意図した。さらに、タワーハムレッツ議会の支援で、国際カレーフェスティバルやバングラデシュ正月祭などのイベントを開催した。それにより、2000年代にブリックレーン南部では、カレーハウスが増加した。カレーハウスは、比較的安価で、主たる顧客は西側のシティで就業する専門職の若い白人と観光客であった。この点で、バングラタウンとしての場所マーケティングに、タワーハムレッツ議会は成功したといえる。

しかし、カレーハウスは、近隣バングラデシュ系住民の日常生活を支える機能とはいえない。また、バングラデシュ正月祭が民族・宗教性を重視するというより、観光イベントとしての特徴が強いことが、伝統的ムスリムから批判された。また、夜間経済活動による住環境に対する悪影響が問題視された。なお、バングラタウンは、イギリス生まれの2・3世にバングラデシュの文化・言語を継承させる装置として重要であるが、2・3世は、労働条件が悪いレストランでの就業を避ける傾向にあった。

一方、トルーマン醸造所と、ディストリクトセンターの範囲から外れるが近接するリッチミックスセンターなどが立地する北部では、シティに近接することを背景に、文化・クリエイティブ産業の集積と、バー、ナイトクラブなどの夜間経済活動が集積し、白人の中流階級の若者を魅了した。さらに、ブリックレーン全体でストリートアートも人気を呼んだ。なお、北方のショアディッチハイストリート駅の開業により、北端のベスナルグリーンロードが新たなブリックレーンへの玄関口となった。

このような、さまざまな事業所の流入による賃

賃料の上昇は、土地家屋を持たないバングラデシュ系経営者に打撃を与えた。2013年以降、南部において、バングラデシュ系事業所が減少する反面、エスニック系レストランが多様化し、全国的チェーンではない高級専門店が増加した。一方、文化・夜間経済が盛んな北部では、空き店舗が多かった。賃貸料の高騰により、入居できる事業所が限定されていると考えられる。これらのことから、ブリックレーンで、商業ジェントリフィケーションが進展しているとみなせよう。しかし、南部で消失したカレーハウスは、彼らの日常生活を支えるものではない。商業ジェントリフィケーションの進展にともない、バングラデシュ系住民の日常生活と経済活動に支障が生じているかどうか、さらに調査が必要である。

ブリックレーンは、夜間経済と文化・エスニック的特色を持つ専門的な商業集積地になりつつあり、中心地階層構造が適用できない存在になりつつある。しかし、タワーハムレッツのタウンセンター政策は、ブリックレーンの観光地と文化・クリエイティブ産業の集積地として重要性を認識しているが、未だに一般のディストリクトセンターの政策を適用する。その点で、政策が実態と整合しないきらいがある。

[付記]

本研究は、平成29～33年度科学研究費補助金・基盤研究(B)研究課題番号：17H02425「地域活性化におけるエスニック資源の活用に関する応用地理学的研究」(代表者：山下清海)と、平成30～33年度科学研究費助成事業「日本の立地適正化計画とイギリスのタウンセンターファースト政策との比較研究」基盤研究(C)研究課題番号：18K01139(研究代表者：根田克彦)の一部を利用した。本研究の骨子は、第13回地理空間学会大会シンポジウム「地域活性化におけるエスニック資源の活用」において発表した。

注

- 1) 松尾 (2020) は、商業ジェントリフィケーション (小売業のジェントリフィケーション) を、賃貸料の値上げなどで、エスニック集団のような低所得者層を対象とする事業所が排除され、より裕福な顧客と対象とする高級志向の事業所が増加する過程と示す。
- 2) 織物産業はバングラデシュ系住民の主要産業の一つとなり、自宅での衣料品製造は、バングラデシュ移民女性の重要な収入源となった (Frost, 2011)。2007年に公開されたモニカ・アリ原作の映画「ブリックレーン」(原作は2003年刊行)では、バングラデシュからロンドンに居住する夫のもとに嫁いだ主人公が、公営住宅の自宅で衣料品を製造するシーンがある。
- 3) イギリスでは、選挙区としてワードが設定され、それに基づき統計ワードが設定されているが、タワーハムレッツは、2014年にワードを17地区から20地区に増やし、2011年センサスを独自集計した (https://www.towerhamlets.gov.uk/lgnl/community_and_living/borough_statistics/Area_profiles.aspx [Cited 2019/7/17])。
- 4) The London Jame Masjid の建物は、ユグノー難民の教会として1743年に建設され、次いで、メソジスト派教会となり、1898年のシナゴーク (ユダヤ教会堂) を経て、モスクに転用された。なお、モスクではイギリスで生まれた2・3世に、イスラム教とベンガル語、バングラデシュの文化を教えており、バングラデシュ文化継承の場である (<http://www.readingmosque.org.uk/> [Cited 2020/12/9])。
- 5) イギリス国民党は1982年に国民戦線 (1967年設立) から分派し、1993年には全国で初めて、タワーハムレッツ・ロンドン特別区の地方選挙で当選者をだし、社会に衝撃を与えた (楳沢, 1999)。
- 6) 1988年に、Saint Mary's Churchyard は、Altab Ali Park に改名された (Gard'ner, 2004)。
- 7) スピタルフィールズ青果卸売市場は1986年に閉鎖され、1991年にレートン・ロンドン特別区に移転し、残された建物は歴史的外観を保持し、2008年にショッピングセンターとして開業した (London Borough of Tower Hamlets, 2009: 8-9)。
- 8) 17世紀に創業したトルーマン醸造所は、ブリックレーンの中心部あり、36,500㎡の面積を持つ、ロンドン最大のビール醸造所の一つであったが、1988年に閉鎖された (Sarri, 2016:28)。
- 9) 19世紀に営業を始めたピショップゲート貨物操車場は、1964年の火事で焼失して放置されていたが、2020年現在、4.4haのオフィス、商業、ホテル、住宅を建設する、グッズヤードという名称の再開発計画が提案されている (The Goodsyard <https://consultation.thegoodsyardlondon.co.uk> [Cited 2020/11/15])。
- 10) シティチャレンジは、1980年代に設立された都市開発公社とは異なり、地方自治体がリーダーシップを持つ5年間の再生プログラムである (Cullingworth et al., 2015: 450-451)。
- 11) 単一再生予算は、貧困エリアを対象として、パートナーシップによりエリアの経済基盤、環境改良などを行うために1994年に設定された、エリア基盤イニシアティブである (Cullingworth, et. al., 2015: 453-454)。
- 12) Bosihakh は1月、Mela は祝祭を意味する。1970年代から、イギリスのバングラデシュ系移民は、バングラデシュの元旦である4月14日に Pohela Boishakh (Pohela は元旦を意味する) を各所で祝っていた。バングラデシュ正月祭は、バングラデシュの正月である4月ではなく、イギリスで晴天が多い5月第2日曜日に開催された (<https://www.towerhamlets.gov.uk/mela/content/about.htm> [Cited 2019/7/11])。
- 13) この記事は、BBC News: Lutfur Rahman wins Tower Hamlets mayoral election (2010年10月22日) <https://www.bbc.com/news/uk-england-london-11604108> [Cited 2020/11/1]) による。なお、2015年の選挙で労働党の白人が市長に選出され、2018年の選挙でバングラデシュ系住民の議員は24人 (23人が労働党)、市長は労働党の白人のまままで2020年現在に至っている (Daily-Bangladesh (2018年5月7日) <https://www.daily-bangladesh.com/english/24-Bengali-councillors-elected-from-Tower-Hamlets-Council/5639> [Cited 2020/12/9])。
- 14) 1999年にロンドンの複数個所で爆弾テロがあり、ブリックレーンでは13人が負傷した (Morton, 2019)。
- 15) プリテン島のインドレストランのうち、85%がバングラデシュ系住民経営とみなされる (Pottier, 2014)。この点で、バングラデシュ系住民は、既にイギリスで定着していたインド料理を標榜する、借り傘戦略を採用したといえる (山下, 2016: 33-40)。
- 16) https://www.towerhamlets.gov.uk/lgnl/business/licences/alcohol_and_entertainment/Late_Night_Levy.aspx [Cited 2020/8/23]。

- 17) Beyond Banglatownのウェブサイト (<https://beyondbanglatown.org.uk/> [Cited 2020/11/9]) における記述。なお、Vibe Bar nightclubは、2014年に閉店した。
- 18) タワーハムレッツ議会は、リッチミックスセンターに360万ポンドを投資し、2006年から2段階で完成した(Mirza, 2009)。第1段階の建物には、3スクリーンの映画館、カフェ、芸術家のための住宅と工房、BBCの放送局が立地し、第2段階ではレコーディングスタジオの除幕式、200席のパフォーマンス会場、展示空間、教育施設とクリエイティブ工房が建設された。
- 19) グローバルストリートアートウェブサイト <http://globalstreetart.com/about> [Cited 2020/12/20]。
- 20) <https://www.aldgateconnect.london/business-improvement-district-2/> [Cited 2020.12.9]。なお、ビジネス改良地区(BID)は、地区内の土地所有者に課税することによって資金を確保し、それにより地域の経済的な活性化を目的とした活動をおこなう地域自治制度である(高橋, 2016)。
- 21) 旧トルーマン醸造所内部など道路に面していない事業所は、カウントしなかった。
- 22) 単独事業所には、大ロンドン庁レベルで展開するチェーンも含めた。
- 23) <https://www.darksugars.co.uk/> [Cited 2020/12/9]。
- 24) <https://londonteaexchange.co.uk/> [Cited 2020/12/9]。なお、この紅茶専門店は、プレミアムティーの品ぞろえの多さと、世界で2番目に高価な紅茶を売っていることでギネスに認定された(New Asian Post (2018年11月12日) <https://www.newasianpost.com/sadiq-khan-launches-london-tea-exchange-on-brick-lane/> [Cited 2020/12/9])。

文 献

裾沢栄一(1999): 戦後イギリスのネオ・ファシスト団体の思想と行動－「国民戦線」(National Front)を中心－。埼玉女子短期大学研究紀要, 10, 45-72.

小森星児(1985): ロンドンの発展と地域構造. 大阪市立大学経済研究所編『世界の大都市①ロンドン』35-76, 東京大学出版会.

高橋昂輝(2016): 北米都市の業務改善自治地区BID－トロントにみるローカルガバナンスとエスニックブランディング－. 地理空間, 9, 1-20.

根田克彦(2016): イギリスにおける大型店の立地規制. 根田克彦編著『まちづくりのための中心市街地活性化－イギリスと日本の実証研究－(地域づくり叢書)』23-52, 古今書院.

根田克彦(2018): 英国のインナーシティ商店街再生と民族多様性. 矢ヶ崎典隆・菊地俊夫・丸山浩明編『シリーズ地誌トピックス2 ローカリゼーション－地誌へのこだわり－』33-43, 古今書院.

根田克彦(2019): イギリスにおけるタウンセンターファースト政策と中心地理論. 阿部和俊・杉浦芳夫: 『都市地理学の継承と発展: 森川洋先生 傘寿記念献呈論文集』76-84, あるむ.

原田桃子(2015): ヒース保守党内閣における移民問題－1971年移民法の成立をめぐる－. ヨーロッパ文化史研究, 16, 27-56.

松尾卓磨(2020): ジェントリフィケーションによる立ち退きをいかに捉えるべきか: ジェントリフィケーションの定義・Marcuseの類型化・多様化するアプローチの検討. 都市と社会(大阪市立大学), 4, 66-86.

山下清海編著(2016): 『世界と日本の移民エスニック集団とホスト社会－日本社会の多文化化に向けたエスニック・コンフリクト研究－』明石書店.

Alexander, C. (2011): Making Bengali Brick Lane: claiming and contesting space in East London. *The British Journal of Sociology*, 62, 201-220.

Alexander, C. (2019): The 'Public Life' of the Bengal diaspora: Performing religion, gender and generation in the Boishakhi Mela. *Sociology*, 53, 229-245.

Alexander, C., Carey, S., Lidher, S., Hall, S. and King, J. (2020): *Beyond Banglatown: Continuity, change and new urban economies in Brick Lane*. Runnymede.

All-Party Parliamentary Small Shops Group (2006): *High Street Britain: 2015*. House of Commons.

Bonadio, E. (2017). Copyright Protection of Street Art and Graffiti under UK Law. *Intellectual Property Quarterly*, 2017(2), 187-220.

Briata, P. (2007): *The Concept of "Culture" in Multi-Ethnic Areas Regeneration Policies: Common Views, Weaknesses, Experiences, Perspectives. The vital city: Diversity, cohesion and the richness of cities*. European Urban Research Association 10th Anniversary Conference, University of Glasgow.

Buettner, E. (2008): "Going for an Indian": South Asian Restaurants and the Limits of Multiculturalism in Britain. *Journal of Modern History*, 80, 865-901.

Carey, S. (2004): *Curry capital: The restaurant sector in London's Brick Lane*. Institute of Community Studies, ICS Working Paper, 6.

Carey, S. (2014): Are touts and late night noise just part of Brick Lane's charm?. *The Guardian* (2014

- 年2月5日) (PDF). <https://www.theguardian.com/lifeandstyle/2014/feb/05/brick-lane-curry-houses-under-threat-council-tower-hamlets> [Cited 2020/12/4].
- Cityside Regeneration Ltd. (2002): *Cityside SRB3 final report*. Cityside Regeneration Ltd.
- Cullingworth, B., Nadin, V., Hart, T., Davoudi, S., Pendlebury, J., Vigar, G., Webb, D. and Townshend, T. (2015): *Town and country planning in the UK fifteenth edition*. Routledge.
- Deckha, N. (2000): *Repackaging the Inner City: Historic Preservation, Community Development and the Emergent Cultural Quarter in London*. A thesis submitted in partial fulfillment of the requirements for the degree, Rice University.
- Fioretti, C. and Briata, P. (2018): Consumption and encounter in (multi)cultural quarters reflecting on London and Rome's 'Banglatowns'. *Urban Research and Practice* (PDF). <https://doi.org/10.1080/17535069.2018.1427784>, 1-22.
- Frost, N. (2011): Green curry. food, *Culture Society*, **14**, 225-242.
- Gard'ner, J. M. (2004): Heritage protection and social inclusion: A case study from the Bangladeshi community of East London. *International Journal of Heritage Studies*, **10**, 75-92.
- GLA Intelligence Unit (2014): *Ethnic Group Fact Sheet: Bangladeshi* (PDF). <http://data.london.gov.uk/census/data/> [Cited 2020/8/31].
- Glynn, S. (2010): Playing the ethnic card: politics and segregation in London's East End. *Urban Studies*, **47**, 991-1013.
- Guy, C. (2007): *Planning for retail development: a critical view of the British experience*. Routledge.
- Hubbard, P. (2016): Hipsters on our high streets: consuming the gentrification frontier. *Sociological Research Online*, **21**(3),1-6.
- Jacobs, J. (1996): *Edge of Empire: Postcolonialism and the City*. Routledge.
- London Borough of Tower Hamlets (1998): *Tower Hamlets unitary development plan*. London Borough of Tower Hamlets.
- London Borough of Tower Hamlets (2002): *Supplementary planning guidance: Brick Lane restaurant and retail uses* (PDF). London Borough of Tower Hamlets.
- London Borough of Tower Hamlets (2007): *Interim planning guidance City fringe area action plan* (PDF). London Borough of Tower Hamlets.
- London Borough of Tower Hamlets (2009): *Brick Lane and Fournier Street conservation area* (PDF). https://www.towerhamlets.gov.uk/lgnl/planning_and_building_control/conservation_and_urban_design/conservation_areas.aspx [Cited 2019/7/9].
- London Borough of Tower Hamlets (2010): *Core strategy development plan document 2025* (PDF). https://www.towerhamlets.gov.uk/lgnl/planning_and_building_control/planning_policy_guidance/Local_plan/local_plan.aspx [Cited 2019/7/3].
- London Borough of Tower Hamlets (2013a): *Ethnicity in Tower Hamlets analysis of 2011 census data. Research Briefing 2013-01* (PDF). https://www.towerhamlets.gov.uk/lgnl/community_and_living/borough_statistics/census_information.aspx [Cited 2019/7/11].
- London Borough of Tower Hamlets (2013b): *Managing development document development plan document* (PDF). https://www.towerhamlets.gov.uk/lgnl/planning_and_building_control/planning_policy_guidance/Local_plan/local_plan.aspx [Cited 2019/7/3].
- London Borough of Tower Hamlets (2018): *Tower Hamlets high streets and town centres strategy 2017-2022* (PDF). https://www.towerhamlets.gov.uk/lgnl/community_and_living/town_centres/high_streets_town_centres.aspx [Cited 2020/7/16].
- London Borough of Tower Hamlets (2020): *Tower Hamlets local plan 2031: Managing growth and sharing the benefits* (PDF). https://www.towerhamlets.gov.uk/lgnl/planning_and_building_control/planning_policy_guidance/Local_plan/local_plan.aspx [Cited 2020/8/14].
- Mavrommatis, G. (2006): The new 'creative' Brick Lane: A narrative study of local multicultural encounters. *Ethnicities*, **29**, 498-517.
- Mavrommatis, G. (2010): A racial archaeology of space: a journey through the political imaginings of Brixton and Brick Lane, London. *Journal of Ethnic and Migration Studies*, **36**, 561-579.
- Mavrommatis, G. (2015): South Asian tales: ethnic entrepreneurship and narratives of spatialized transnational identities emerging in an East London (UK), inner-city area. *Diaspora Studies*, **8**: 89-103.
- Mirza, M. (2009): Aims and contradictions of cultural diversity policies in the arts: a case study of the Rich Mix Centre in East London. *International Journal of*

- Cultural Policy*, 15, 53-69.
- Morton, S. (2019): Remembering the Brick Lane bombing 20 years on. *East London Advertiser* (2019年4月24日) (PDF). <https://www.eastlondonadvertiser.co.uk/news/crime-court/20th-anniversary-of-the-brick-lane-nail-bomb-1-6005641> [Cited 2020/10/31].
- Pappalepore, I., Maitland, R. and Smith, A. (2014): Prosuming creative urban areas. Evidence from East London. *Annals of Tourism Research*, 44, 227-240.
- Pottier, J. (2014): Savoring “The Authentic”: The emergence of a Bangladeshi cuisine in East London. *Food, Culture and Society*, 17, 7-26.
- Sarri, S. (2016): *Palimpsest Industry: industrial heritage and intangible cultural heritage in the creative city: A comparative analysis of the Old Truman Brewery in London and Technopolis in Athens*. Thesis for: MSc Spatial Design: Architecture and Cities, University College London.
- Shaw, S., Bagwell, S., and Karmowska, J. (2004): Ethnoscapes as Spectacle: Reimagining Multicultural Districts as New Destinations for Leisure and Tourism Consumption. *Urban Studies*, 41, 1983-2000.
- Shaw, S. and Bagwell, S. (2012): Ethnic minority restaurateurs and the regeneration of ‘Banglatown’ in London’s East End. In *Selling Ethnic Neighborhoods: The Rise of Neighborhoods as Places of Leisure and Consumption*. eds. Aytar, V. and Rath, J., 34-51. Routledge.
- Smyth, J. (2018): The history of street art in Shoreditch (PDF). <https://www.mbymontcalm.co.uk/blog/history-street-art-shoreditch/> [Cited 2020/9/12].
- Spitalfields Neighbourhood Planning Forum (2020): *Spitalfield neighbourhood plan 2020-2035: Pre-Submission (Regulation 14) Version* (PDF). <https://www.spitalfieldsforum.org.uk> [Cited 2020/8/24]
- Warren, A. (1993): Urban Regeneration in the 1990s: A review of the City Challenge initiative. Bartlett School of Architecture & Planning, University College London.
- Woodward, R. (1993): One place, two stories: Two interpretations of Spitalfields in the debate over its redevelopment. In *Selling Places: the city as cultural capital past and present*. eds. Kearns, G. and Philo, C., 253-266. Pergamon.

The Brick Lane Shopping Street and the Town Centre Policy of Tower Hamlets, London

NEDA Katsuhiko

Faculty of Education, Nara University of Education

This paper aims to evaluate the relationship between the land use of Brick Lane and the town centre policy and branding efforts of Tower Hamlets council in London. Since the late of the 1990s, Tower Hamlets council has branded Brick Lane as Banglatown and made a better tourist attraction and more jobs for British Bengali. In 2019, the northern part of Brick Lane became a cluster of cultural and creative activities and a variety of night-time economy activities. And street arts attracted many tourists from England. But since 2013, in the southern part, businesses of Bengali have decreased, while many sorts of ethnic restaurants and the number of upscale specialty shops has increased. It is possible to say Brick Lane has been in the process of retail gentrification. Brick Lane attracts visitors from England but Tower Hamlets council situates Brick Lane as the district level centre, which meets local needs, in the hierarchy.

Keywords: town centre policy, ethnic resource, retail gentrification, Brick Lane, London